

## *The Moon and Sixpence* 覚書

脇 田 勇

*The Moon and Sixpence* は Maugham の長編 *Liza of Lambeth, Of Human Bondage* 等に次いで、第10作目の小説として1919年に出された。主人公 Charles Strickland は画家 Paul Gauguin の忠実な伝記の錯覚を与えるがフィクションと言った方が正確である。「*The Moon and Sixpence* は小説の形式で書いた Gauguin の伝記では勿論ない。Gauguin について聞いた話に基づいてはいるが、そのうちの主だった事実だけを使い、残りは、幸いにして私が持ちあわせていた創造力に頼ってしまった」と Maugham 自身も語っている通りである。この作品の発表の15年前、Maugham はパリにあって魅力的な芸術家たちと交流を持っていた。例えば Arnold Bennet, Clive Bell, Aleister Crowley らがその中にいた。その一人にアイルランド出身の画家 Roderic O'Connor という男がいた。彼は *Of Human Bondage* の中で若い画家 Clutton のモデルになっていて、「誰も知らない画家、奇妙な男で、株の仲買人をしていたが、中年で絵をはじめた男」との出逢いを語る所がある。O'Connor は Gauguin の Tahiti への最初の航海のあとで、1894年ブルターニュで彼に逢い、その弟子になっている。Gauguin が南海にもどる際、それに同行しようと考えたが、結局断念している。しかし Gauguin の芸術的、反社会的な行動の代弁者となった。この様に、Gauguin 伝説に対する Maugham の興味は1904年頃にはじまっているが、1919年のこの小説の誕生まで15年間この資料は温められていたことになる。第一次大戦中、Maugham は Tahiti を訪れ、Gauguin を知っている人間を探索し、Gauguin の痕跡の発掘に当っており、Gauguin の住居跡に残されていたガラス絵を持ち帰り、Riviera 海岸 Cap Ferrat の Villa Mauresque に飾りつけることさえやっている。イギリスの諜報機関の用務を

帯びロシアの Petersburg (現在の Leningrad) におもむいたが、結核となりその治療のため Scotland のサナトリウムに送られ、その後海浜の保養地に3ヶ月滞在、その間にこの作品を書きあげている。この小説は出版と同時に好評を得、1915年発刊の *Of Human Bondage* をあまり評価しなかった一般読者も、この作品には惜しめない賛辞を呈したのであった。

*The Moon and Sixpence* は芸術家を写實的に扱ったもっとも優れた作品の一つであると言える。主人公の Charles Strickland は、その当時の多くの芸術家の主人公たちの如く、社会、義務、因襲、抑制というようなものに反抗的態度を取っている。この作品において、Strickland の芸術家としての発展過程に若干難が見出されるが、彼の絵画に立向う情熱を描写することで、芸術家氣質を説明しようと試みた点で、Maugham は20世紀の数多くの作品の作家の典型と言ってよいであろう。

この作品の誕生した時代背景を考えてみなくてはならない。まず第1次世界大戦の終焉の翌年にこの作品が生れていることに注目すべきである。大戦のもつ幻滅感と増大した機械化と産業化が芸術家の持つ個性、独創性、反抗精神に関心をかもし出したということ——換言すれば、リアリズムの世界からロマンチズムの世界への脱出の願望をヨーロッパ人全体がいただいていたということでもある。*The Moon and Sixpence* は、Maugham の南海と極東についての長い研究のさきがけをなすもので、*The Trembling of a Leaf* (1921), *On a Chinese Screen* (1922), *The Painted Veil* (1925), *The Casurina Tree* (1926) などとともに、大戦後の読者から満足感をもって受けいれられて行った。つらい戦争に飽き、ヨーロッパの文明とそのかかえる諸問題について不安感を懐き、人々の心は異国情緒に逃避の道を見出したのである。

*The Moon and Sixpence* の出た1919年は Herman Melville の生誕100年にあたり、アメリカでは、ほとんど忘れられていた19世紀の小説家に関する数多くの批評的、伝記的文章が書かれ、*Moby Dick* はもちろんのこと *Omoo*,

*Typee* に対する興味が復活した。これら南洋のロマンチックな物語が愛好されるにつれて、*Maugham* の書いた作品への興味も増し加わったという指摘もなされている。<sup>(1)</sup>

前述の如く、*The Moon and Sixpence* が *Gauguin* の伝説に暗示をうけ、それに基づいて書かれたことは事実であるが、伝記あるいは伝記的小説と言うことはできない。確かに、*Gauguin* と *Strickland* とには数多くの類似点がある。両方とも画家としての生活をはじめめるために仕事を放棄した株式仲買人でいずれも社交性に欠け、道徳に無関係であり、ある目立った肉体的特徴をもち、*Tahiti* で夭折する前に土着の娘に満足感を見出している。特に、*Gauguin* も *Strickland* も死の直前に注目すべき傑作を物しているというような点である。

こうした類似点に反し、多くの相異点のあることも見逃すことができない。*Gauguin* は仲買人としての職を失う前の10年前、余暇を利用し孜孜として絵を描くことに没頭しているが、*Strickland* の芸術への関心はある日突然衝動的にひきおこされることになっている。*Gauguin* 夫人は、*Strickland* 夫人と違って、夫の絵好きであることを長い間知っていた。しかし、彼女は、夫を生活に満足している立派な商売人であると信じ、彼を日曜画家としか考えていなかった。彼女は夫が職業を捨てた時には心の動揺をおぼえたが、*Strickland* 夫人のように即刻離別するようなことはしていない。彼がパリに出て行きたい気持ちに駆られた時も、8ヶ月ルーアンで共に暮している。*Gauguin* と妻はお互に文通をやめなかった。彼女は、夫のことを、気質や行動ははげしかったが、悪意も猜疑心もない人だと言った。*Gauguin* がサロンで展覧会をやり、*Monet* や *Huysmans* から賛辞をうけたことも知っていた。*Tahiti* への出発前、ある派の青年画家たちが、ブルータニューやパリで彼の周辺に集まっていたし、アルル

(1) Richard A. Cordell: *Somerset Maugham*, p. 111.

で Van Gogh と同居していたこともある。彼の知人の中には, Verlaine, Morice, Rodin, Carrière, Mallarmé 等の芸術家がいた。絵の道に専念して行くうちに、フランスでは満足せず、漂泊の夢がふくらんで行ったのである。南洋の小説をはじめて書いた Pierre Loti を読むことにより刺激されたのかもしれない。フランス政府の芸術院長のもとで無給の役人としての地位につくため Tahiti に出発して行ったが、2年後パリに作品を携えて戻り、展覧会を開いたのである。しかしその異国情緒の異常さとあまりにも大胆な色彩の使い方に心乱された批評家は、かたく口を閉ざしてしまった。再び Tahiti に戻って行き、生涯の終りに一つの傑作を完成しようとありたけの活力と情熱を傾けた。その絵は偉大な謎に満ちた傑作である。しかし Strickland の如く、その最後の作の破棄は要求しなかった。Marquesas で彼はたえず病気をしていた。Strickland は最後妻と子供の3人であらゆる人間関係から隔絶されて、癩病におかされながらも絵筆を捨てず、凄惨きわまりない姿で死んで行くことになっているが、Gauguin の死因は、Cordell によれば心臓発作であった。<sup>(2)</sup> Gauguin は妻と子供たちに強い関心を持ち、自分の芸術が彼らのためになるようにと希望し、Tahiti で家族と一緒にいることを計画していた。小説の主人公は、「私」(著者)の「一文なしのまま奥さんを見棄てることはできませんよ」という言葉に、「17年間私が養ってきたんだ。今度は自分で養ってみたいだろう」と答えているほど非情な男として描かれている。また、Gauguin は、たえず自分の絵を分析し、論議の対象としているが、Strickland は芸術理論などにさらさら関心がない。Gauguin は Tahiti で経済的に逼迫したが、1893年帰国した後、叔父の遺産を得て、広いアトリエを新築、相当豪勢な生活を送った。Strickland の如く、孤高の生活ばかり送っていたのではない。夫として、父として愛情溢れる人間であった如く、ドミニック島でも、白人が土人の利益を無視するのを怒り、官憲と争い、3ヶ月の禁錮に処せられることもあったほどのヒューマニストで、小説の主人公のような冷酷なエゴイストではなかった。

(2) Ibid., p. 109.

*The Moon and Sixpence* は *The Making of a Saint* (1898) 以来はじめて用いた所謂“一人称単数”で書かれ、「私」として作家が登場する。これ以後の短編、長編には、しばしば作者が「私」、Ashenden, Maugham という形であらわれ、ストーリーの舞台廻しという重要な役割を果すことになっている。

この作品のあとに生れる *Cakes and Ale* (1930), *The Razor's Edge* (1944) その他多数の作品に出てくる作者自身は、機知に富み、寛容で、仲間の態度を興味深げにながめているが、この作品の「私」は、いささかしかつめらしく、堅苦しく、自意識が強い。Maugham 批評家の中には、Strickland の性格には作家の思想、感情の投影があるのではないかと説いているものもある。換言すれば、*Of Human Bondage* がそうであったように、作者のある意味におけるカタルシスとして書かれたということでもある。Strickland には、作者が心の奥底で犯したいと思っていながら、性格からまた社会的立場から抑止されている、社会的、芸術的反抗の精神が反映されていると考えてもよからう。

さて、この作品の構成を考えてみよう。全編58章のうち、16章までは舞台がロンドン、パリで、「私」と Strickland 一家との交渉が筋となる。その後5年の星霜を経て、17章から44章までは、「私」はパリに移り住んで、Strickland 及びその画家仲間の Stroeve 夫妻との一年余りの交際が中心となる。さらに15年の空白の後、「私」は Tahiti に旅行し、ここに流れついた Strickland の生活と死の顛末を5人の人間から聞くことになる。最後の1章は、再びロンドンが舞台で、Strickland 未亡人と「私」との再会に当てられている。時代背景は19世紀末から20年位の間と推定される。刊行の年が、この小説の終りの年と一致している。

この作品の冒頭では、Strickland をしばりつけている絆—社会的な圧迫と因襲的拘束—があつかわれる。退屈で、勿体ぶった、息のつまりそうな社交界の絵図が描き出される。この一家の食堂は「清らかで、芸術的で退屈である」。

子供たちは「清潔で、健康的で、標準的」である。父親は実に鈍感そのもので夫人は彼女の催す多くのディナーにおいて、客人に夫をあわせまいと配慮する。この社交的場面を通して因襲的生活を描くことにより、このあとの Strickland のパリ生活の活気と興奮、 Tahiti における芸術三昧の歳月が、いかに自由の探究であったかが、対比されて浮彫になる。こうした社会的環境から脱出し、その後自分の一家にいかなる責任も義務も認めようとしなない点は、Strickland が 20世紀の芸術家の主人公の典型的なものであることを語っている。Maugham は、はじめの教章において、家族、義務、名誉心、因襲に対する Strickland の否定の気持の深さを描いている。社会と因襲的道德の代弁者である「私」は Strickland が以前の生活の絆を心底から忘れたいと願っていることを発見する。

Strickland 夫人の依頼をうけて彼に会った「私」はロンドンに戻り、Strickland のパリにおける生活を報告し、女のためでなく、絵を描きたいための家出であった経緯を告げる。夫人の態度は一変し、悪い病気にでもなって死んでしまえなどと言う。収入のたえた夫人はタイプの仕事により、生計を立てる目途がついていた。

この作品の中程の所で、Maugham は芸術家と道德の問題にもっぱら注意を集中、Dirk Stroeve とその妻 Blanche との関係をとおして、このテーマをギリギリ限度まで拡大して行く。この話がこの小説のほぼ半分を占めていることから、この作家のこの問題に取り組むしたたかな熱意を感じとることができる。つまり、偉大な芸術から利益を得るため、社会はどの程度まで反社会的芸術家を容認すべきかという問題の提起である。

Strickland 夫人と別れて5年後「私」はパリに住むようになった。そこで前からの知人のオランダ人の画家 Dirk Stroeve に逢う。Dirk は絵に関する知識と鑑賞力は秀れているが、彼の絵自体は凡庸きわまりないものであった。妻の Blanche は静かな魅力をたたえた英国女性で、人々から軽蔑されている道化的

な夫をこよなく尊敬している。この Dirk は、Strickland が素人画家ではなく、偉大な天才であると認めている。妻の Blanche はこの Strickland をたいそう嫌悪している。Strickland が大病に冒され、善意の男 Dirk は、妻を説得して、自宅にひきとり看護にあたる。病いえた Strickland は Dirk のアトリエを我物顔に占有する。たまりかねた Dirk は彼に退去をせまる。所が、あれほど Strickland を嫌っていた Blanche が、夫の哀願にもかかわらず、Strickland と共に出て行くと言い出す。とことん善意の Dirk は彼女と Strickland とを残し、自分が家を出て行く。ある日、Dirk は妻が砒酸を飲んで自殺をはかったことを知る。Strickland は Blanche によって情欲を満すと、自分を占有しようとする女にたえきれず、出て行ってしまったのである。Dirk は彼女を病院に入れたが、1週間苦しんだ挙句の果死んでしまう。失意の Dirk は元の自分のアトリエに戻って、そこに Strickland の描いた妻の裸像を発見する。怒に駆られ、次の瞬間、その絵を切り裂こうとするが、それが芸術品であることに気づき、己の行為に罪悪感を覚え、妻を奪った呪わしい相手であっても、優れた芸術の創作者であることを認めることにより、憤怒と嫉妬が感嘆と崇拜に変貌してゆく。まさに19世紀的耽美精神の世界というべきである。作者は Dirk に「僕たちは共に Blanche を愛したのだ。オランダの私の家には、君を置くぐらいの余裕がある。一緒に来ないか」といざないの言葉をはかせている。Strickland の行動は、表面的には、残忍、野蛮で弁護の余地がない。しかし、彼の行動が十分に正当化され、この弁護の道具になるのが Stroeve である。窮極の美を探究し表現しようとするひたむきの芸術家の魂の戦いは、世俗的モラルの世界を超克して行くものであることを、Strickland という一人の画家を通して、作者は語りかけていると言わざるを得ない。

*The Moon and Sixpence* 全編を貫いているもう一つのテーマは、芸術的気質と愛情及び性との間の関係である。三人のタイプの異った女性が登場する。すなわち Strickland 夫人、Blanche Stroeve、土人の娘で Strickland の現地

妻になる Ata である。これらの女性に対する芸術家の反応に、作者の意図が語られていると言ってよい。

Strickland 夫人は社交的意識を持ち因襲の絆にしばられた女性で、Maugham からいつもひどいしうちを受ける型の人間である。Cakes and Ale の二度目の Driffield 夫人、The Razor's Edge の Isabel Bladley などと同じく、自分の自由を保持しようとしている男にとっては脅威的存在である。主人に拷問の苦しみを味わわせる女というよりは、むしろ男性が、彼女によって社会の主流に同化され、彼の個性を窒息させる社会的状態に追いつめて行く型の女性である。

Blanche Stroeve は、本能に左右される女性で、自分の性的魅力で男をしばりつけようとする。Liza of Lambeth の Liza、The Painted Veil の Kitty、Christmas Holiday の Lydia などのように、彼女は感能的で、それによって悲劇をひきおこすことになる。Strickland の天才を开花させる触媒にはなるけれど、彼女は芸術にとっては脅威である。Strickland にとっては性的情熱と愛情は一種の絆で、その芸術の完成のためにはそこから解放されていなければならぬ。

"I don't want love. I haven't time for it. It's weakness. I am a man, and sometimes I want a woman. When I've satisfied my passion I'm ready for other things. I can't overcome my desire, but I hate it; it imprisons my spirit; I look forward to the time when I shall be free from all desire and can give myself without hindrance to my Work."<sup>(3)</sup>

Maugham の考えでは、愛する女にうちこむことと芸術にうちこむこととは両立せず、互に他を破壊するということである。創造的な男は、ある時は芸術的表現を、別の時は性的満足を追うことができるが、女性はこの二分法を憤り、男の芸術を抑制し、破壊しようと考えている。

The Moon and Sixpence において、芸術家にとって女性の理想像は土人の

(3) W. Somerset Maugham: The Moon and Sixpence, p. 171.

娘 Ata に見出される。Of *Human Bondage* の Sally, *Cakes and Ale* の Rosie, *The Razor's Edge* の Suzanne Rouvier のように, Ata は温かく, 寛大で率直である。官能的, 母性的であるが, Strickland に要求することがほとんどない。Strickland をして「おれを放っておいてくれるよ……食物をつくってくれ, 赤ん坊たちの世話をみてくれる。こちらのたのんだことをやってくれる。おれが女に望んでいるものは, たしかに与えてくれるな」と言わしめるような女である。

多くの制約—社会的, 家庭的, 肉体的, 精神的—から自分自身を解放しようとしてあがいている点で, Strickland は Maugham の小説にあらわれる多くの人物に似ている。しかし外の人物の場合と違って, 彼の *bondage* は異っている。すなわち絵を描こうとする情熱に向けられているからである。Strickland が家庭, 名誉, 愛情を否定するのは, 自発的な選択と言わんよりは, のっぴきならない内的必然性から生れてきている。彼の心にとりついている桎梏から脱出できるのは絵という手段をとおしただけである。Strickland がバりに逃避して, まだ芸術家として生長しはじめる前にあっても, 絵を描くことは, 自分にとって逃がれられない必然なのだと言らせる所がある。

"I tell you I've got to paint. I can't help myself. When a man falls into the water it doesn't matter how he swims, well or badly; he's got to get out or else he'll drown." There was a passion in his voice, and in spite of myself I was impressed. I seemed to feel in him some vehement power that was struggling within him; it gave me the sensation of something very strong, overmastering, that held him, as it were, against his will. I could not understand. He seemed to be possessed of a devil and I felt that it might suddenly turn and rend him. (4)

別の所で Maugham はこの *obsession* を癪にたとえ, Dirk Stroeve は, 芸術家の重荷について語り, それ故にこそ, 芸術家を寛容と忍耐で扱わねばなら

(4) Ibid., pp. 54-55,

ぬと言う。小説の終り近くで、Strickland の生前の証言者の一人 Captain Brunot が、Strickland の美の奴隷と化したすさまじさを語る所が出てくる。彼の内なる美の鬼は冷酷無比で、一瞬の平安をも与えず、彼を揺ぶりつつけていたともらす。

“And the passion that held Strickland was a passion to create beauty. It gave him no peace. It urged him hither and thither. He was eternally a pilgrim, haunted by a divine nostalgia, and the demon within him was ruthless. There are men whose desire for truth is so great that to attain it they will shatter the very foundation of their world. Of such was Strickland, only beauty with him took the place. I could feel for him profound compassion.”<sup>(5)</sup>

R. L. Calder も苦しみさいなまれた魂が表現という解放を求め、絵具をとおしてのみものを伝えることができ、この方法によってのみ結実するのだと指摘する。

“His revolt from conventional behaviour and love is merely the abandoning of these forms of bondage in the face of another, more powerful, one. His lack of concern for his wife, family, the Stroeves, comfort, even fame, is genuine; blinded by his artistic demon, unaware of anything else ... Strickland can only communicate through the medium of paint, and only in this way can he achieve ultimate freedom ...”<sup>(6)</sup>

Strickland は、*Of Human Bondage* の Fanny Price, Miguel Ajuria 及び Clutton, *The Alien Corn* の George Bland たちが芸術的表現を達成するに至らず挫折したのと異なり、自分を拘束する何物もない Tahiti という環境で、しかも自分に絆をつけない Ata という女性と一緒に暮しつつ、傑作を作りあげて行くのである。Dr. Coutras の証言によって語られる最後の作品で、彼は自分の幻想を画き、もろもろの絆からの解放を達成することができたのである。作者は、この不朽の作品が、Strickland の妻に対する命令で死後破壊

(5) Ibid., p. 225.

(6) R. L. Calder: *W. Somerset Maugham and Quest for Freedom*, p. 146.

されてしまったことを書き加えている。しかし、彼は全てのもの、すなわち弁明と名声を望む気持、後世への期待からさえ解放されたことになる。*Of Human Bondage* も *The Moon and Sixpence* も、肉体的、精神的自由をあつかっているが、そのアプローチの方法が相反している。Philip は田舎の医者という平凡な道を選び、漂泊の旅を放棄してしまいが、Strickland は、文明から脱出し、Tahiti にあって、芸術を通し自由を実現する。Calder は「Philip は6ペンスの銀貨を手に入れるために、月を放棄している」と説明している。

In reviewing *Of Human Bondage*, *The Times Literary Supplement* had written that “like so many young men he (Philip) was so busy yearning for moon that he never saw the sixpence at his feet.” In the end, however, Philip surrenders the moon in order to grasp sixpence.<sup>(7)</sup>

この小説の人をまごつかせる題名を *The Times* に出た *Of Human Bondage* に対する書評から取ったものであると Cordell も指摘している。

特定の個人にとって最高の生活とは何かという問題について、*The Moon and Sixpence* の中に Abraham という医師のエピソードが語られている。「私」が St. Thomas 病院の医学校時代にユダヤ人の Abraham という男がいた。奨学金で入学してきたのだが、在学中とれる限りの褒賞を一人じめする才能の持主であった。医者として将来の地位は約束され、名誉と富が手のとどく所にあった。所が新しい地位につく前に休暇をとり中東の旅に出かけたまま、辞表を出して病院をやめてしまった。それから10年後、「私」は Alexandria で上陸の時、検疫医師になっている彼と再会する。話によれば、ロンドンの St. Thomas 病院の新しい地位につく積りであったが、Alexandria で白々と陽に映える街と、埠頭にむらがる群衆を見ているうちに、天からの啓示の如くここそ自分の余生を送る場所と決心してしまったということである。彼自身

(7) Ibid., p. 147.

は現在の生活に満足そのものであった。その後ロンドンで昔の医学生仲間の Alec Carmichael という男に出逢う。彼は Knight の爵位を得、美人の妻と豪華な暮らしを営んでいた。たまたま Abraham の話を噂にきいていて、自分はお蔭で成功できたんだけれど実に馬鹿な奴だとあしざまにののしるのを耳にして、「私」は、「本当に自分のしたいことをすること、自分に満足し、一番幸福だと思ふ生活を送ることが一生を台なしにすることだろうか。それとも1万ポンドの年収と美人の細君を持ち、外科医になることが成功なのか」と心の中でひとりくりかえす場面が出てくる。

Tahiti における Strickland の経験を強調するためにこの短いエピソードが挿入されているのである。Strickland は最大限に自己を表現する環境と雰囲気を得て、つくり物でない真の幸福をつかんだのだと作者は叫んでいるのである。

この作品の最後は、イギリスの社交的場面に戻り、Strickland が逃避した生活が再び紹介される。彼の妻は、以前といささかも変わっていない。温和で、標準的な子供のうち、息子は愛想のいい陸軍の軍人、娘は砲兵少佐の妻におさまっている。Tahiti における画家の生活と対比することにより、読者は、Strickland のひたむきな反抗が、彼に幸福と成功をもたらしたのだと考えざるを得なくなる。

諸外国の作家、批評家の中には、Strickland の画家への回心が余りにも唐突で、その結果彼の性格の掘り下げが不十分である点を取上げている場合がある。この小説の構成からも判然としている通り、著者は、所謂全能の立場で主人公を描写するのではなく、「私」という一人称の人間が、5人の証人を通して語られる言葉から、Tahiti における主人公の姿を組立てているのである。彼が示そうとしたのは、平凡であるが、感受性の強い観察者の目に映ったままの天才のスケッチと言ってよい。Calder の指摘する通り、Maugham の取った方法は、事実、噂、会話、反応等によって、Strickland が天才に違いないと

いう印象を与える、外側から攻める手法を用いたことを忘れてはなるまい。芸術家の資質は、Maugham の扱ったよりは、より複雑で、深みのあるものであるかも知れないが、美の追究のため物の怪につかれた如く深淵にのめりこんで行く Strickland の人間像は、相当程度描き出されていると言ってよいであろう。

46章から57章までは、Tahiti を訪れた「私」が、5人の証人から、ありし日の Strickland の話を聞き、その証言を忠実に語る形で、「私」が Strickland の芸術家像を作りあげて行く。言うなれば、推理小説的な話ぶりで、読者を魅了することに成功している。

第1番目に Captain Nichols の話で出てくる。「マルセイユで私は、Strickland に逢ったのです。一緒にどんな仕事もし、どん底生活を送ったものです。南洋に行くために、船員として雇ってくれる船を探している所でした。どうやら、濠州かニュージーランド行の船にのり組んで、Samoa か Tahiti に渡りたいと言っていました。彼の心は、あの濃紺の海に囲まれた、明るい島、そういった幻に魅入られていたようです。幸福にも、濠州の船が発作で投身自殺をした男の代りに彼をやとってくれ、火夫として乗組み、それ以来、彼と会うことはありませんでした」ということであった。

第2番目に証人としてあらわれるのは、ユダヤ系のフランス人の Cohen という商人である。「Strickland が Tahiti の Papeete という町に来て、金に困っていた時、下手くそだがとにかく画家だというので、関心を持った。そして自分の農園の監督にやとってやりました。ところが2、3ヶ月でやめて、ジャングルに引っこんでしまいました。金に困ると町に出て来て何か仕事をし、金を手に入れ、また帰って行くということをやっていました。いつか200フランの借金のかたに1枚の絵を持ってきたんですが、私には皆目見当もつかない代物でした。そのうちこの英国の画家が大変な天才とわかり、パリの兄貴に送ったら3万フランなら買おうと言ってきたので驚きましたよ。もし Strickland

の奴生きていたら、お前の絵の代金だと2万9千8百フラン返してやったら、聞きもんだと思うのだが」と Strickland との交際を語った。

第3番目は、ホテルの女主人 Tiaré Johnson である。彼女は、物凄く大柄の、肥った女で、外観は恐ろしいようだが、実は世話好きで、得意の料理で人人を楽しませている混血児であった。「彼がマルセイユから半年かかって Tahiti に着いたとき、心の故郷をここに見出したようでした。彼の身の廻りの世話をしてやっていたが、嫁さんをもらってもいい年頃と思って、ホテルで働いていた Ata という土人の娘を世話しました。双方とも異議がないので結婚式をあげてやりました。彼女は Taravao に少し土地を持っていました。彼は椰子林に囲まれた Ata の二部屋のバンガローで結婚生活を始めたんです。その後の3年間は、彼の生涯で最も幸福な時期だったと思います。やがて子供が生まれ、ばあやと孫娘、さらに一人の若者が来て住んでいました。」

第4番目の証人は、近くの島に住んでいる Captain Brunot であった。「Strickland が Papetee にいた頃、よくチェスをやったが、結婚したあと、1度訪問したことがあります。そこはこの世の楽園のように美しかった。私は彼の礼賛者で、絵を買ったこともあります。静かな夜、二人はよく語りました。子供の世話をし、料理を作ってくれ、彼に何も要求しない Ata には満足しているようでした。ヨーロッパに帰りたいと思わぬかと訊ねると、私は死ぬまでここにいるんだという返事でした。」このあとで「私」は Brunot の案内で Strickland の病気や臨終のことに詳しい Dr. Coutras を訪問することになる。

第5番目の証人 Dr. Coutras は体格のがっしりした、大兵肥満な老フランス人であった。「ある時 Taravao まで診察に行った時のことである。一人の若い娘が Ata からの使いで、白人が病気なので来て欲しいというわけです。14kmの悪路なので一時はためらいましたが、医者としての義務感から、バンガローに行きました。まず、絵を描いている Strickland を見て、驚くとともに、厚ぼったくふくれあがった顔は、癲病の徴候をあらわしていることを知りました。Strickland は、あと何年生きられると訊ねるのです。誰にも判らんといいますと彼は山の奥にはいると言うのです。Ata は誰が行かなくとも、自分はある

の妻だから、あなたが一人行ってしまえば私は首をくくって死ぬと言い出す仕末です。彼はお礼に絵をくれました。病苦に耐えつつ、絵を描き続けるその勇氣に打たれました。それから2年以上すぎました。私は逢うことがありませんでした。噂では癩病に恐れをなして皆家から逃出し、夫婦と子供3人だけのことでした。原始のジャングルの中のバンガローを訪れ、主人に会いたいという Strickland の、病毒におかされたのか、しわがれ声が聞こえてくる。会いたくないと言っているという Ata の言葉に仕方なく会うことを断念しました。絵具を少し送ってくれという依頼をうけて、私は山を下りたのです。2、3年たって危篤だとの連絡をうけ、かけつけてみると、彼は崩れ果てて死んでいました。私は壁一杯にかかれた絵を見て、圧倒され、異様な感動を覚えました。」という証言であった。

56章のこの部屋の中の異様な風景と癩病に崩れ死んで行った Strickland の死体の描写はこの小説の中の圧巻で、簡潔な文体を通して鬼気せまる光景が非常にリアルに描き出される。

... His eyes grew accustomed to the darkness, and now he was seized by an overwhelming sensation as he stared at the painted walls. He knew nothing of pictures, but there was something about these that extraordinarily affected him. From floor to ceilings the walls were covered with a strange and elaborate composition. It was indescribably wonderful and mysterious. It took his breath away. It filled him with an emotion which he could not understand nor analyse. He felt the awe and the delight which a man might feel who watched the beginning of a world. It was tremendous, sensual, passionate; and yet there was something horrible there too, something which made him afraid. It was the work of a man who had delved into the hidden depths of nature and discovered secrets which were beautiful and fearful too. It was a work of a man who knew things which it is holy for men to know. There was something primeval there and terrible. It was not human. It brought to his mind vague recollections of black magic. It was beautiful and obscene. <sup>(8)</sup>

Then his eyes fell on the bed of mats in the corner, and he went up, and he saw the dreadful, mutilated, ghastly object which had been Strickland. He was dead ... <sup>(9)</sup>

(8) *The Moon and Sixpence*, pp. 239 - 240.

(9) *Ibid.*, p. 240.

「これは天才だ」と彼は絶叫する。Strickland は視力のない目でこれを仕上げたのだ。しかしその最後の傑作は生前の Strickland の命令により Ata は焼き払ってしまったのであった。これを聞いた「私」は、「Strickland 自身、傑作だということを知っていたんでしょね。つまり、彼の望みは達せられ、彼の一生は完成されたというわけ。いわば世界をつくり、それをよしと見たわけですね。だから誇りをもって、同時にまた侮蔑をもって永久にそれを抹殺してしまったのだ」とドラマティックな言葉を Dr. Coutras に返している。*The Summing Up* の終章に出てくる「生活の美は……それぞれがその性格と仕事に合った行動をすること、ただそれだけのことである」をうらづける大往生の姿といえようか。

The beauty of life ... is nothing but this, that each should act in conformity with his nature and his business. <sup>(10)</sup>

この小説のタイトルは、何を意味しているのであろうか。*The Moon and Sixpence* の “moon” は「狂気の発作」を、“sixpence” は「取るに足らぬもの」を意味している。すなわち、月は人を狂気に導くと言いふるされた芸術的創造への情熱を暗示し、6 ペンスは Strickland が弊履の如くかなぐり捨てた世俗の因襲、束縛を意味していると考えてまちがいなからう。

#### Reference Books

References to Maugham's works are to the Heinemann (London) editions.

*The Moon and Sixpence*, Heinemann, London, 1966.

*The Painted Veil*, Heinemann, London, 1967.

---

(10) *The Summing Up*, Chap. 77.

*Christmas Holiday*, Heinemann, London, 1963.

*Of Human Bondage*, Heinemann, London, 1966.

Richard A. Cordell: *Somerset Maugham, A Writer for All Seasons*,  
Indiana University Press, 1969.

Robert Lorrin Calder: *W. Somerset Maugham and the Quest for Freedom*,  
Heinemann, London, 1972.